不登校児童・生徒支援事例報告書

別室「ココカラ・ルーム」の取り組みについて

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、集団行動に入れず、グループ討議を苦手とする傾向から教室に入ることができず、不登校となっていた。登校しても玄関付近で立ち止まり、そのまま下校する日が多かった。別室「ココカラ・ルーム」の運営を始めてから、毎日登校し、表情も明るくなり、数回ではあるが授業に参加することができている。

具体的な取組

（１）組織力の向上

加配教員を中心に、３人体制で別室担当を設けた。校内別室指導支援員を加え、別室「ココカラ・ルーム」の運営を行っている（週５日１，２時間目）。担当教員が担任や学年の特別支援担当との連携を密にし、多くの職員で別室指導に携わっている。

（２）校内委員会の充実

毎週月曜日に校内委員会（管理職、各学年の特別支援担当、支援員、SC、SSW）を開き、情報共有を行っている。また、火曜日（運営委員会）、木曜日（生活指導部）の委員会を通して、学年からの細かい情報や生徒の変化、保護者の様子等、常に学校全体で状態を把握している。

（３）実践の成果

別室の登校時間を少しずらすことで、安心して登校することができるようになった。また、毎日同じ教員と支援員が別室で生徒を迎え入れることで、リズムができ、コミュニケーションをとる機会が増え、居場所ができ表情が明るくなった。

（４）個々の不登校生徒への支援

毎日登校する生徒もいれば、週に２～３回の生徒もいる。生徒にあった別室利用を行っている。登校後に、授業に参加できる場合は支援員が付き添い、安心した気持ちで教室へと行ける体制をとっている。

成果

別室を開設したことで、自分から毎日登校できるようになった。登校後に、授業への参加もできる回数が増え、表情も明るく意欲的な面も出てきている。多くの先生との関わりを通して、学校での居場所ができ、気持ちが安定してきている。

課題

別室の開設時間を増やしていき、学習に対する意欲を向上させていくことが今後の課題である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

不登校生徒に対する支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校２年生であり、他地区から転入してきた。以前在籍していた中学校では運動部に所属し、一生懸命取り組んでいた。前籍校と雰囲気が違うため、学級活動や学校行事に参加できず、欠席が目立つようになった。登校しても保健室で休み、帰宅する状況だった。

具体的な取組

毎週木曜日に開催される「特別支援校内委員会」で当該生徒に対する今後の対応方針について協議した。校長・副校長・学年主任・特別支援教育コーディネーター、特別支援教室専門員、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等、様々な立場の担当者が複数の角度から意見を出し合うことができた。

スクールソーシャルワーカーが当該生徒の自宅を家庭訪問し、保護者から聞き取りを行った。また、同時にスクールカウンセラーが当該生徒の聞き取りを行った。その結果、当該生徒の思いと、保護者の思いにずれがあることが判明した。

保護者は勉強の遅れを懸念していたため、特別支援教育コーディネーターは市教育委員会が運営する教育支援センターへの通級を提案した。当該生徒及び保護者は教育支援センターを見学し、週に数回程度、当該教室に通級することを決めた。

教育支援センターへの通室日数も徐々に減り始めたため、学年主任や担任とも協議し、火曜日は教育支援センターへ通室、水曜日は保健室に登校し、担任と面談、木曜日はふれあいルーム(校内別室)に登校し、スクールカウンセラーと面談、というサイクルで、１週間につき３回は自宅を出て、それぞれの担当者と面談することとなった。

成果

当該生徒の状況に応じて適切な対応を取るため、関係諸機関と連携を取りながら組織的な取組を継続的に実施することができた。その結果、当該生徒は少なくとも週に３日は外出し、それぞれの機関でケアを受けられている。

課題

当該生徒にとってどのような対応が最善なのか、特別支援校内委員会において引き続き検討していくことが今後の課題である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室指導支援員とスクールソーシャルワーカーが連携した不登校支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、学業の不振を理由に約１年前から不登校になっている３年生男子である。授業への出席は拒んでいるが、学校行事への参加意欲は高い。学校行事前は、提出物のために放課後に登校することも多い。担任からは、週１回程度の電話連絡をとおして、当該生徒の家庭での状況を確認している。

具体的な取組

週１回実施している校内特別支援委員会において、当該生徒の支援について検討するとともに、保護者の理解と協力を得るため、スクールソーシャルワーカーによる家庭訪問を実施した。家庭訪問において、当該生徒及び保護者との面談を実施し、双方のニーズを把握し、校内別室指導における計画の参考とした。

家庭訪問の内容を踏まえて、校内別室指導支援員と情報共有を図り、進路指導を中心に校内別室指導の計画を立てた。指導内容は、主に当該生徒の作文及び面接指導を行い、授業への出席も促すようにした。当該生徒の心理的な支援については、スクールソーシャルワーカーからのアドバイスを取り入れた。

校内別室指導支援員は、具体的な作文の書き方や面接ノートへの取り組み方等について個別に指導した。指導開始時は、当該生徒の戸惑っている様子も見られたが、校内別室指導員に質問しやすい環境もあり、安心したコミュニケーションを通じて、当該生徒は、継続的に課題に取り組むことができた。

学級担任、特別支援教育コーディネーター、スクールソーシャルワーカー、校内別室指導支援員とで、これまでの支援について情報交換をするともに今後の支援計画について検討した。また、保護者へ当該生徒の状況について説明した。

成果

スクールソーシャルワーカーと校内別室指導支援員が連携することで、当該生徒と保護者のニーズを踏まえた支援が可能になり、当該生徒は、週に１日登校できるようになった。また、支援が充実したことで校内別室指導を希望する生徒が２倍以上に増加した。

課題

校内別室指導を希望する生徒の増加に伴い、校内別室指導支援員の恒常的な配置と支援計画等の時間の確保が課題である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

不登校支援について

不登校児童・生徒の状況

・コロナ禍以降、学年が上がるにつれて不登校生徒が増加している。
・中学１・２年生の５・６月、９・10 月に新たな不登校が発生する傾向がある。
・家庭内の生活が中心となる生徒、定期的に校内の別室や市の適応指導教室に通室する生徒、不定期に教室登校する生徒など不登校生徒の状況は様々である。

具体的な取組

〈事例１〉
週 2 回 50 分程度の通室ができている。生徒本人の希望により全校生徒が使用する昇降口から離れた出入口を使用し登校不安の一つである在校生との接触を回避している。支援員との信頼関係が深まり安心して通える場所ができたことで本人が利用時間の延長や同年代との関わりについて前向きな変化が表れた。

〈事例２〉
毎朝担任とあいさつを交わして配布物を受け取り下校という登校を続けた。その流れが安定した後、別室登校を提案し週１～２回 50 分の通室を開始した。同時期に市の適応指導教室も体験し別室と併用して利用することでより多くの人との関わりや自宅以外の安心できる場所の確保を目指す。

〈事例３〉
「週 1・2 時間程度学校の中で心身を休める時間が欲しい」と要望があり別室の利用を開始する。日常生活の漠然とした不安を相談したり学習のつまずきに寄り添ったりと不登校の未然防止として利用している。

〈不登校の捉え方〉
不登校状態を二つの軸で捉え生徒を理解する。第１は、『学校における支援の三つの段階』を活用し、不登校状態を【期間】で捉える。第２は、生徒のエネルギー量や活動度を「潜伏期」「活動期」「停滞期」に分類し【社会活動度】として捉える。二軸から生徒の状態を理解する。

成果

不登校の捉え方やその段階を校内で共通認識できるよう支援内容の原則を明確にした。それにより担任のみが把握する不登校支援ではなく、学校として不登校生徒の実態や支援を把握し組織的に検討できるシステムが構築された。

課題

別室利用に関する修正や見直し。また、別室が不登校生徒等の居場所の一つになるよう教員間の意識の変革と構築が課題である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

登校サポートルームの活用について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、登校することや教室に入ることが難しい状況がある。
火・木曜日４限～６限を居場所として校内別室を開けている。
日によるが３～８人（利用最大 10 人）が利用している。

具体的な取組

週１日から週２日、学校での居場所として過ごせる時間を設けた。
また、給食も食べられるように変更したことで、午前から午後に渡り、長時間登校することが可能になった。

自分のペースで学習する集中タイムと、人と交流（トランプ、UNO、まちがい探しなど）するフリータイムとを分けることで、各自が過ごしやすい時間になっている。
（生徒が目的に合わせて登校する時間を変更している。）

スクールカウンセラーの勤務日と重なるようにしているので、スクールカウンセラーが相談時間でなくても会うことができ、雑談などを通じて生徒の気持ちをほぐすことができる。
また、担任や養護教諭など、大人も意識的に利用している生徒と会い、触れ合うことで教員との関わりが生まれている。

校内別室指導の部屋を、地元の商店街の名前から命名し、生徒・保護者・教員がなじみやすく、活用しやすいようにした。

成果

登校する日が増えた生徒がいる。
今まで給食を食べていなかった生徒が、食べることができるようになるなど、学校で過ごす時間が増えた生徒がいる。

課題

空き教室の確保が難しく、状況により別室支援室が移動することがあるため、今後、支援を必要とする生徒が利用しやすい環境を整えていくことが課題である。